

## 《シンポジウム II》

## 脳核医学の現状と将来：新しい機能診断をめざして

## 司会の言葉

米 倉 義 晴 (福井医科大学)

星 博 昭 (岐阜大学)

脳の画像診断は、1970年代におけるエックス線 CT の登場によって断層画像の時代へと大きな転換を示し、その後の MRI の導入で形態診断法としての現在の基礎が完成した。核医学検査は、この一連の過程で一時的にその意義を失ったが、1980年代に登場した脳血流 SPECT 検査によってその息を吹き返し、機能画像診断法としての地位を固めつつある。しかし、MRI の技術的進歩は著しく、拡散画像や血流画像の登場により、従来から核医学検査が得意としてきた機能診断の領域にも踏み込みつつある。このような状況の中で、核医学はより特異的な機能診断法としての道を開拓しつつある。本シンポジウムでは、脳核医学の現在の状況を整理するとともに、新たな機能診断をめざす将来の可能性について討論したいと考える。

一般にこのような臓器別のシンポジウムでは、装置や薬剤といった技術的な側面からの話題提供、あるいは内科や外科の臨床サイドからみた核医学への期待など、異なる領域からシンポジストを選んで討論することが多いが、今回は 2 時間と

いう限られた時間を有効に利用して脳核医学の将来性について討論するために、あえて脳核医学を専門とされている第一人者の方々にシンポジストをお願いした。特に、海外で優れた業績を上げておられるミシガン大学の蓑島先生とトロント大学の市瀬先生に参加していただけることになり、国際的な視野で脳核医学についての討論ができるものと期待している。

21 世紀は脳の時代であるといわれている。米国議会が 1990 年代を脳の 10 年 (Decade of the Brain) として位置づけて、人類にのこされた未知の領域である脳科学の研究に積極的に予算を投入していくことを決議したが、わが国においても大型予算が続々と脳の研究に投入されている。核医学的手法は、生きたヒトの脳における機能の描出というユニークな特徴を生かして、脳の研究に大きく貢献できる可能性が示されている。その成果は、いずれ日常の診療へと還元されるものであり、本シンポジウムがそのような期待に応える一助となれば幸いである。